

【高知県立大学】

留學生活の思い出は力になる

文藻外語大学

李 佳穎



台湾で日本語を何年間も勉強し続けてきたのだが、段々日本語能力の向上に限界を感じるようになっていた。そこで、日本に来ることにした。では、留學する場所は東京や京都ではなく、高知を選んだのはなぜだろうか。それは、日本への一般的なイメージと違う風景を見たいからである。

日本に来ないと知るはずがないことが沢山あるし、感動したことと感心したことも少なくない。これらのことを通じ、私は成長した。これから、私の留學生活について話したいと思う。

まず、カルチャーショックという、日本では台湾への認知度が低い人が結構いるようである。元々台湾と日本は地理やら、歴史やら、生活に至るまでお互いに大小影響を受けあってきた。それに、台湾では、毎日テレビやインターネットで日本事情を簡単に知られる。したがって、台湾人と日本人はある程度お互いの国のことについて認識していると思っていた。ところが、日本に来たら、事実はそうでないと分かり、驚いた。例えば、台湾の公用語は中国語ということが知っている人は、ほとんどいないようである。「中国語が話せますか。」と「漢字が上手ですね。」という話もよく聞いた。しかし同時に、これは台湾の皆はまだ色々努力しなければならないということだと思った。自分の力は小さくても力を尽くし、もっと外国人に台湾についてのことを知って欲しいと思う。

次に、授業については、いつも学校の皆が色々助けてくれて、感動した。一番印象に残ったのは、前期に参加したフィールドワークのことである。津野町で土佐茶を作る農家に訪問し、取材した。そのとき、土佐弁が通じない私は非常に困っていた。しかし、フィールドワークのメンバーたちがとても丁寧に説明してくれて、本当に助かった。その時の合宿も皆のおかげで、楽しむことができた。

それから、生活習慣にも多くの違いがある。一番いいと思うのは、ごみの分け方と出し方である。最初は細かく面倒だと思ったが、後は清潔で環境にいいと思うようになった。良い習慣を身につけられて、良かったと思う。

最後に、日本に来て、様々なイベントに参加し、旅行もよく行った。教科書以外の知識や文化の勉強はもちろん楽しかった。しかし、一番素晴らしいと思ったのは、人との出会いである。道に迷ったとき、いつも日本の方に親切に道を教えてもらった。知らない日本文化や習慣も分かりやすく詳しく説明してくれた。お返しとして、私もよく台湾についてのことを説明した。このように、台湾と日本の情報が交流でき、貴重な経験になったと思う。親切な人たちと出会い交流ができるたびに、「日本語を勉強して、本当に良かった」という思いがパッと頭に浮かんでくる。

日本で留學したこの10ヶ月を振り返ると、楽しいときの皆の笑い声と、辛いときを乗り越えた達成感があった。この10ヶ月間で体験したことを通じ、もっと自信ができた。これからも留學生活での美しい思い出を力にし、前向きに頑張っていきたいと思う。